

尾八重神楽の伝承

—三十三番番付の解説—

A Study on the Tradition of Ohae Kagura : Court Music and Dance

佐々木昌代 元水 均* 中武貞夫**

Masayo SASAKI Hitoshi MOTOMIZU Sadao NAKATAKE

I. はじめに

尾八重神楽は、宮崎県西都市大字尾八重で、地域の象徴として、地域の人々の誇りとして、永く大切に守り伝えられてきた夜神楽である。かつて、米良地方を統治していた米良（菊池）氏が領内の神楽を一堂に集めて競演の会を催した際、米良随一の神楽であるとして尾八重神楽がその榮譽を讃えられた^{註1}とされ、尾八重の人々は米良山中を代表する神楽として、社中株を有する家を中心に高い自負心を持って伝承してきた。しかも、親から子、子から孫へと尾八重神楽を伝承してきた家系の多くは、修験を専らとする法者屋敷を源とするため、見せる神楽や外部から評価される神楽を好まず、神に奉仕する神楽を本旨としてきた。この巧く舞おうとするのではなく、神に向かったただひたすら一生懸命に舞うという伝統は、現在も堅く守られている。

尾八重地区は、明治維新によって菊池氏の支配を離れ、尾八重村、東米良村を経て、昭和37年に西都市に編入された。尾八重神楽は、昭和48年12月20日に西都市、昭和56年3月10日に宮崎県の重要無形民俗文化財に指定された。残念なことに、この頃から過疎の波が、地区にも、神楽にも押し寄せる。尾八重では神楽の伝承者を祝子と呼び、社中会を組織しているが、他の神楽伝承地でもそうであったように、民主化が計られた。社中株に拘らないで、希望する者は何人も祝子となって神楽を習い覚え、祭り本番で舞うことができることになった。さらに、神楽を習い舞う祝子の組織である社中会に加えて、昭和46年12月25日、地区の住民全体で神楽伝承を支援するために神楽保存会が結成された。過疎の波に抗して、地区住民総がかりで神楽を守り抜こうと強く決意されたのである。支援の輪は、地区住民から、地区外に転出した者、毎年の尾八重神楽を楽しみに集う人々、主旨に賛同する一般の人々へと広がって、平成6年には神楽保存会を後援する賛助会が結成された。

尾八重神楽では神楽の稽古を習いと呼んでいる。現在の習いは、西都市民会館の研修室や宮崎県立妻高等学校の同窓会館などに祝子が集まって、宮司や先輩祝子を師匠に行われている。過疎化が進み、尾八重小・中学校、小椎葉小学校、東陵中学校が閉校になったために、西都市街や宮崎市に転出した祝子は、小・中学生の子ども達を伴って習いにやって来る。言うまでもなく、習いに通って稽古を重ねた子ども達は、祭り本番で立派に祝子の役割を果たす。子ども達は、習いの場だけでなく、家庭でも父親から神楽の手解きを受ける。家庭では、舞や楽の稽古とともに、祝子としての心構えや責任、夜神楽三十三番の意味や謂われを祖父や父親から語り聞かされる。尾八重神楽では、家単位での神楽伝承ならでわの良き伝統である心意伝承が生きているのである。

*尾八重神楽保存会・社中会事務局長 **尾八重神社宮司

よって、本稿は、尾八重神楽三十三番の舞が持つ意味や謂われについて解説しようとするものであるが、家庭での口頭伝承のように噛み砕いた言葉で記述する。保存会役員が中心となって、これまで大切に保管されてきた文献資料や言い伝えなどから、神楽の保持継承のために編纂した『平成十四年度ふるさと文化再興事業 尾八重神楽解説書 神楽唄・問答全集』を基本にして、神道や民俗学などの知識がない一般の夜神楽参拝者にも分かりやすい解説としていく。

II. 由 来

尾八重は、急山間地ではあるが、比較的穏やかで肥沃な土地柄である。よって、古くから人々が居住し集落を形成していたと考えられ、磨製石器が出土していることやデト・ベト・オット三兄弟の伝説などから、その歴史は語り始められる^{注2}。

もとを雄八重と称していた尾八重は、応永2（1418）年、黒木和泉守重実が初代雄八重領主となり、その子孫が代々雄八重を領有した。永正8（1511）年、雄八重領主黒木吉英によって尾八重神社が創建された。

天正8（1580）年、米良弾正忠重秀の攻略に遭い当時の領主黒木兵庫頭重常が自刃したことによって、明治初年まで米良氏の支配するところとなった。米良氏が雄を尾に改めて尾八重に改称したとされる。銀鏡、小川とともに、米良地方における政治経済・教育文化の中心地として栄え、明治維新以降は尾八重村、東米良村の要所としての地位を占めてきた。

尾八重神楽は、保安2（1121）年に壱岐宇多守幸延が尾八重湯之片を安住の地と定め、同時に伝習所を設けて神楽を普及させたことから始まったと伝えられる。現在の西都市三宅に知行地を授けられて京の都から迎えられた宇多守は、権威ある神主であり^{えきごと}易事に秀でた法者でもあったが、修験道をさらに究めて己を磨くために米良山中に移り住み、湯之片神社の祖すなわち湯之片神社の神主を世襲してきた壱岐家の祖先ともなった。尾八重神楽の創始者、湯之片神社の祖である宇多守は、神楽番付の最初の降臨神花鬼神として出現するが、^{やりみつごんげん}鑓三権現として都萬神社にも祀られて^{注3}いる。

米良氏の支配下では、尾八重神楽は領主主催の殿様がかりとして執り行われた。攻略されて自刃した黒木兵庫頭重常と惨殺された今王丸（重常の長子）が米良一族に崇って厄災が起きないように、湯之片神社に伝わる神楽を招聘して、領主米良氏が領民とともに尾八重神社例大祭に神楽を奉納することにしたのである。これ以来、壱岐家の氏神であった岩清水正八幡大明神は、宿神様と呼ばれ、尾八重神社例大祭に出現されることになった。また、湯之片神社例大祭では、黒木氏の悲劇を織り込み、別々に祀られている重常父子と重常夫人の対面の儀が冒頭に行われる。重常父子は命を落とした尾八重に祀られているが、米良氏の攻略を察していち早く湯之片神社に託され難を逃れた重常夫人はそのまま湯之片に祀られているからである。

尾八重神楽は、筑後伝あるいはチッコ伝であるとも伝えられその伝承は不詳であるが、修験者に特有の鎮魂動作である「ヘンベ（反問）」が随所にみられ、修験者の^{とぎん}兜巾が変化した^{けがしら}毛頭を被って舞うなど、修験色が濃厚な神楽とされている。尾八重に旧来から住んでいた人々の間で伝えていた地神楽と宇多守に代表される修験者等がもたらした神楽が融合、伝播、変遷を繰り返して、現在の尾八重神楽の姿に至ったと考えられるが、法者屋敷の家系が中心となって神楽を守り伝えてきたことによって修験が色濃く保持されてきたことは想像に難くない。

さらに、尾八重神楽は、米良山中神楽に共通する特徴である神体具現の夜神楽であるが、同じ東

米良の銀鏡神楽や中之又神楽とも趣の異なる特徴を持っている。取り分け、尾八重神楽一番の特徴として挙げるべきは「カラス飛び」と言われる足運びである。山奥に籠もって修行を積む修験者にとって、下界のことを知らせてくれるカラスは益鳥である。そのカラスが足を揃えて地面をピョンピョンと飛び様子を摸して「カラス飛び」は編み出された。爪先を巧みに操って右左右、左右左、右左右、左右左の順で足を踏み替えながら神屋を軽快に巡る舞い振りは、険しい山中も飛ぶように駆け抜けたであろう修験の動きを彷彿とさせる。他の特徴としては、里芋を神饌として献げること、里芋を使った舞があること、参拝者も交えて舞われる百式拾番と言う神楽があることなどが挙げられる。

例大祭の執行日は、古くは旧暦12月13日、明治後期から1月29日、12月25日と変更されたが、今日では11月22日に一旦定着した後、平成20年度より11月の第4土曜日と定められた。これに加えて、湯之片神社大祭^{うちこししゆくじんじや}、打越宿神社大祭が行われる。

Ⅲ. 番 付

順番	演目	舞方	装束	採物
1	遡上	2	手頭 素襖	扇 鈴
2	清山	2	烏帽子 狩衣	扇 鈴
3	地割	2	手頭 素襖	刀 柷葉 扇 鈴
4	幣差	2	手頭 素襖 腰弊	扇 鈴
5	花鬼神	1	毛頭 千早袴 腰弊	面棒 扇
6	大神神楽	2	毛頭 素襖なし	柷葉 扇 鈴 舞弊
7	宿神地舞	2	手頭 素襖	扇 鈴
8	宿神	1	宝冠 千早袴 腰弊	面棒 扇
9	鎮守神楽	2	手頭 素襖	扇 鈴
10	八幡	1	毛頭 千早袴 腰弊	面棒 扇
11	八社神楽	8	手頭 素襖	扇 鈴
12	八子舞	2	手頭 素襖	扇 鈴
13	稻荷鬼神	1	毛頭 千早袴 腰弊	面棒 扇
14	四方鬼神地舞	4	手頭 素襖 腰弊	扇 鈴
15	四方鬼神	5	四方：毛頭 千早袴 腰弊 中央：烏帽子 赤鉢巻 素襖 赤擧 帯刀	面棒 扇
16	獅子舞・獅子荒神	5	地舞：毛頭 素襖	扇 鈴
			獅子：獅子頭 毛頭 覆衣	
			荒神：毛頭 赤襷	面棒
17	磐石	1	黒頭巾 丹前 カゴ（背） テゴ（腰）	鈴 舞弊
18	神和	1	白頭巾 冠 留袖 帯 筥迫 扱	扇子 舞弊
19	四人神崇	5	四方：毛頭 赤襷	刀 鈴
			神主：烏帽子 素襖	舞弊
20	一人釧	1	毛頭 腰に赤力帯	赤襷 小太刀

21	大將軍	2	毛頭 赤襷 矢 (背)	弓 矢 鈴
22	柴荒神	2	荒神：毛頭 千早袴 腰弊 柴 (背・袂)	面棒 扇
			神主：烏帽子 素襖	舞弊
23	綱地舞	2	手頭 素襖	扇 鈴
24	綱荒神	2	荒神：毛頭 千早袴 腰弊	面棒 扇
			神主：烏帽子 素襖	舞弊
25	綱神楽	4	毛頭 白鉢巻 赤襷 黒腕抜き 黒脚絆 白足袋	刀 鈴
26	繰落し	2	手頭 素襖	扇 鈴
27	衣笠荒神	2	荒神：毛頭 千早袴 腰弊	面棒 扇
			神主：烏帽子 素襖	舞弊
28	伊勢神楽	1	烏帽子 狩衣	鈴 舞弊
29	手力	1	烏帽子 素襖 千早 腰弊	鈴 舞弊
30	戸開	1	毛頭 素襖 (袖を襷掛け)	面棒 扇
31	お清	2	毛頭 麻衣 (腰までたくり上げる) 赤力帯	柵葉 扇 鈴 舞弊
32	百式拾番	12	手頭 素襖	扇 鈴
33	舞上	1	毛頭 赤襷 矢 (背)	弓 矢 鈴

* 舞弊：舞に使用する御幣のこと。磐石弊、神和弊、お清弊は特別に造られる。

* 腰弊：舞幣一対を腰の背に十文字に差すこと。

IV. 番付の解説

1番 辻上しめあげ はさんまい (初参舞)

辻を立て、神屋しめあげ (神楽斎場) ができ上がったことを神に告げる舞。辻とは神が降臨する目印となる依代よりしろのことで、天地陰陽五行てんちいんりやうごぎやうに則って立てられる。辻を中心に設営される神屋のことを山と呼び、太鼓、楽打ちなだ、笛、手拍子てぶちなどを奏する楽人のことを山方やまかたと称する。

2番 清山きよやま (初参舞)

いよいよ神楽を始めるときに当たって、神屋を清め祓う舞。清め祓うとは修験の修祓に相当し、清祓いの儀、お祓いのことである。祓いの言葉を発して祓いの所作を行うことで、神楽では祓いの言葉を唱えて祓いの舞を行う。ここでは初参舞ということになる。初参舞は、尾八重神楽の基本の舞とされる。尾八重神楽の祝子となった者が最初に習い覚える舞で、初参舞を習得すると、降臨される神の舞に先立って神屋を清め祓う舞である地舞を概ね舞うことができる。

清山は、遷宮神楽、宮神楽に次ぐ重要な位置づけで、舞の手数が多く、極めて厳粛な神楽である。よって、古老と呼ぶに相応しい経験豊富な祝子が、ゆっくりと滑らかに澁みなく舞う。基本の舞ともされているが、「一生舞っても百点満点の保持者はいない。」と言われる。何故ならば、尾八重神楽では舞が象徴する神楽の内容は、形 (舞の動き) によって表されるものではないと考えられているからある。



清山

3番 ちわり 地割

おおとこぬしのかみ
 大地主神に神屋を設営する地を借り受け、その五方（東西南北に中央を加えた五つの方位のこと）の神を鎮め祀る舞。清山とともに、尾八重神楽の基本の舞の一つに数えられる。結界を定めて区切る意味も含まれ、しもんじゅ下陣では抜き身の刀を持って五方を割る。下陣とは、舞全体を大別した舞の後半のことで、前半は上陣と言う。また、五方を割るとは、方位を重んじて、五方に向かって丁寧かみのじゅに舞を繰り返すことである。

鎮め祀るとは、願成就のために「神様そこに来てください。」と神の鎮座を請う意であるとともに、災いや祟りをもたらす障り神に対してその御心を慰めお祭りして守り神となつていただくよう請う意でもある。

4番 ひさし 幣差

ふとたまのみこと
 太玉尊を敬い祀る舞。太玉尊は、みてぐら御幣帛（御幣）を造り、注連縄を張って、神楽（祭り）を始められた知恵者として敬われている。神屋の造営・飾りを象徴する弊飾りの舞でもある。

舞が下陣に入ると、花鬼神が舞い入る。花鬼神が舞っている間、幣差の二人の祝子は、神屋の上手と下手に分かれ、片膝をつき、開いた扇を肩で担ぐように持ち、花鬼神の舞を見守る。おしきのときに立ち上がって花鬼神と一緒に舞い、花鬼神が退場した後に、腰の背に差していた御幣を手を持ち、弊の手を舞って舞い納める。舞の手は、手に持つ採物を変える毎に、御幣を持って舞うことを弊の手、鈴を持って舞うことを鈴の手、扇を持って舞うことを扇の手などと呼ぶ。

おしきとは舞のまとまり毎の区切りに行く所作のことである。おしきの所作は舞によって異なるが、清山（初参舞）を始めとする清め祓う舞では舞い手の二人の祝子が向かい合って同じ所作を行い、花鬼神、八幡様、稻荷鬼神、四方鬼神の舞では神屋の中央で舞う降臨された神と傍らで

控えていた祝子が向かい合って舞う。上手、下手の祝子の順に、降臨神が面棒を横に持って祝子を押すような所作を行う。

幣差の舞にはナグラが入る。ナグラとは、神楽を舞いながら唱教を唱える（唄をうたう）ことである。その1番は「神楽キユモムスウジノゴキト、サオシカヤ、コガネノミスニ、納メマシマス」と唱えるが、呪文のようなもので、その意味は不詳である。幣差の舞を用いる14番四方鬼神地舞、32番百式拾番にもナグラが唱えられる。



花鬼神 おしき

5番 はなまじん 花鬼神 神面の舞

尾八重神楽の祖である壱岐宇多守の舞。宇多守は、湯之片神社の祖として湯之片若宮大明神とも称される。尾八重神楽を創始し、伝習所を設けて普及させた功績を尊んで、三十三番の番付の中で一番最初に降臨される神である。また、神楽の祖であることに因んで、花鬼神は祝子として夜神楽に初めて奉仕する者が舞う仕来りになっている。舞は鬼神舞である。



花鬼神

6番 だいじんかくら 大神神楽

神道信徒の信仰の根源である大日靈貴尊おおひるめむちのみことすなわち大神様だいじんさま（天照皇大神あまてらすおおみかみ）をお祀りする舞。大神様に神楽を無事に滞りなく執行させていただくことを告げる舞で、穏やかに舞う。

大神神楽にも唄が入る。幣差の舞と同じように神楽を舞いながら唄を唱えるが、ナグラとは言わない。唄は、1番から4番までであり、「大神ノ降り給エバアヤオハエ、錦ヲハエテゴザトウマセム」と始まる。大神様に神楽開催を告げる。

ここで白い御幣が使われるが、大神様のような尊い神には色物は使用しない仕来りになっている。尾八重神楽では、6番大神神楽、8番宿神、10番八幡、22番柴荒神の尊神には濁りのない白い紙が用いられる。また、古事記に則って、清山：祭場を清める舞、幣差：御幣帛しきさんぼんを象徴する舞、大神神楽：大神様に祭りの執行を告げる舞、の3つの番付を尾八重神楽の式三番しきさんばんとしている。式三番とは、神楽の意味を凝縮して表現するということである。よって、式三番の最初に清山として舞われる初参舞はさんまいのことを初三舞とも称する。

7番 しゆくじんぢまい 宿神地舞（初参舞）

宿神様お出ましのため、神屋を清め祓う舞。出番に備えて、宿神様とともに御神酒が振る舞われるノリ付けの儀がある。このノリ付けの儀は、降臨する神と神の舞に先立つ地舞を舞う祝子に

対して必ず出番前に行われる。ノリ付けの儀が行われるのは、宿神様と柴、綱、衣笠の三荒神のお出ましの前であるが、綱荒神では地舞に加えて綱神楽を舞う祝子にも御神酒が出される。

初参舞を舞い終えて退場し、控えの間で装束を改め、矢と鈴を持ち、宿神様に従って再び登場する。宿神様が舞っている間、上手と下手に分かれて控え、おしきを行う。

8番 ^{しゆくじん}宿神 神面の舞

湯之片神社に祀られている岩清水正八幡大明神の舞。湯之片神社を創建した壱岐家が、氏神として京の岩清水八幡から勧請した神様である。湯之片神社社家である壱岐家が代々受け継いで舞う仕来りである。露払い（^{びやっかい}神主）、供揃え（地舞を舞った二人の祝子）を従えて登場し、神屋の中央關開の下に敷かれた^{はなごさ}莫蔭の上で、鬼神舞をゆったりと厳かに舞う。莫蔭は花御座と呼ばれているが、貴人の座る席に薄畳を敷いたので御座であり、神が依りつかれる高い所である^{かみくら}神座の意である。花御座は、8番宿神、22番柴荒神、25番綱荒神、27番衣笠荒神、28番伊勢神楽、29番手力で敷かれる。ただし、手力では、30番戸開の舞が舞い入ると花御座は巻いて片付けられる。ノリ付けの儀が行われ、花御座が敷かれる神楽は、特別に尊ばれる神の舞であり、重要な神の謂われを説く神楽である。



宿神

宿神様のお出ましの前にはホラ貝を吹き鳴らし、口上を申しあげる。この番付が終わるまでは神楽ばやしを出してはならない決まりで、厳粛な雰囲気の中で、神事として神楽が執行される。参拝者（観客）も、帽子を脱ぎ襟巻きも外して拍手を打って、和服を着て参拝していた頃ならばまさに襟を正して、宿神様の舞を拝見する。また、宿神様のご加護を頂戴しようと、参拝者からは盛んに撒き銭が神屋に投げ入れられる。

9番 鎮守神楽（初参舞）

八幡様お出ましのため、神屋を清め祓う舞。舞が下陣に入ると、八幡様が舞い入る。八幡様と鎮守神楽の祝子が対面して行うせぎ、おしかすみと言われる所作がある。

せぎとは、花鬼神で行われるおしきと同じ所作であるが、花鬼神では地舞の祝子を3回繰り返して横に構えた面棒で押すところを八幡様では1回押すという違いがある。押す回数の違いだけで、なぜ、おしき、せぎと言いつけるかは不詳である。おしかすみとは、地舞の祝子二人に正対した八幡様が、やはり面棒を横に構えながら出ては下がる動作を2回繰り返した後、二人を面棒で押し分けて前方に舞い出る所作のことである。

降臨される神をお迎えするための清め祓う舞を地舞と言うが、宿神様のように地舞を舞い切る場合と八幡様のように舞の途中で舞い入る場合がある。途中で舞い入る場合は、降臨された神が舞い終えて退場された後に、振立を舞う。振立は、舞った後のお祓いのことである。

10番 八幡 神面の舞

尾八重の領主であった米良（菊池）氏が旧来から祀っていた氏神様の舞。氏子の崇敬神、武勇の神、農耕の守護神である。尾八重神楽が殿様がかり（領主主催）で執行されることになった際、米良の殿様を敬って舞われるようになった。殿様がかりとなって取り入れられた鬼神舞であるので、舞も楽も他と趣が異なる。

11番 八社神楽（初参舞）

八つの鹿倉社を順に巡って行われる鹿倉祭り（小祭り）で舞われ、最後に本宮の祭り（大祭）で舞い上げられていた鹿倉様の神楽を凝縮して、尾八重神社の祭り（大祭）の中で八社神楽として奉納するようになったとされる。ただし、鹿倉毎に地域の個性を発揮して舞われた神楽は見られなくなったが、鹿倉祭りは現在も行われている。

鹿倉八社は、岩井谷（祝谷）、湯之久保、小八重、大椎葉、小椎葉、樅木尾、横尾、小中尾である。尾八重神社創建以前は各集落毎に鹿倉宮があり、鹿倉祭りもそれぞれに催されていたが、尾八重神社創建後に八つの鹿倉社に集約された。尾八重にあった鹿倉宮は、尾八重神社の末社として鎮守森の宮となっている。

12番 八子舞（初参舞）

八子とは、法者や山伏の少年期のことである。先ず、先陣が折敷に鏡を載せ、下陣が折敷に芋を載せて舞い出して五方を祓い、次いで、初参舞を舞う。先陣は、舞の先導を務める祝子のことである。二人舞の場合は、先陣に従って舞う祝子のことを下陣と言う。先陣は逆に向かって左

(上手)、下陣は右(下手)で舞う。また、先陣の鏡は神を、下陣の芋は芋文化(芋を主食にしていたこと)を象徴している。芋は、尾八重で食用として栽培されている里芋の一種であるイセド芋で、芋頭を植えると子芋、孫芋が次々と連なって増殖するので子孫繁栄の象徴でもある。

親のお使いで神を祀った祠にお供え物を持って行く子どもの姿をそのまま神楽にしたとされ、稲荷鬼神の地舞になる。

13番 いなりきじん 稲荷鬼神 神面の舞

所謂、お稲荷さんの舞。作の神、山の神、田の神、農耕神などとして、人々の諸願を成就する神である。八つの鹿倉にそれぞれ祀られている稲荷神を一つの鬼神舞に集約した舞。八社神楽は宮の存在を象徴する鹿倉祭りの清山に、稲荷鬼神は御神体を象徴する鹿倉祭りの祭神舞に例えることができる。

なお、湯之久保鎮座神面の舞と言われるのは、神面の宿が湯之久保にあるためである。他の神面の宿と同じように、盗難や火災を避けるために定められている宿で、特別な地縁はない。

14番 しほうきじんぢまい 四方鬼神地舞(幣差の舞)

四方鬼神の地舞。地舞のほとんどは初参舞であるが、ここでは幣差が舞われる。途中で、四方と中央の鬼神が舞い入る。

15番 しほうきじん 四方鬼神 神面の舞

東：きのみおや木祖(青) くぐぬちのみこと久久能智命、南：ひのみおや火祖(赤) かぐつちのみこと軻遇突智命、中央：つちのみおや土祖(黄) はにやすひめのみこと埴安姫命、西：かねのみおや金祖(白) かなやまひのみこと金山彦命、北：みずのみおや水祖(黒) みずはめのみこと罔象女命の舞。恩恵を受けている万物のすべてが木火土金水からできていることを教え知らしめ、存在するすべてに感謝して舞われる。

まず、東西南北の鬼神が登場し、闕開を正面に四方の隅から鬼神舞を繰り返しながら舞い寄り、舞のまとまり毎に対となる地舞の祝子とおしきを行う。後半、四人舞に中央の鬼神が舞い込み、五人舞になる。

おごり面とも言われるが、前半では四方の鬼神が互いに陣取り合戦のごとく闘ぎ合い、後半では割り込もうとする中央の鬼神と割り込ませまいとする四方の鬼神が闘ぎ合うためである。若い元気のよい祝子が務めるので、ときに激しく闘ぎ合い、熱気を帯びた舞になる。最後に、中央の鬼神は、四方の鬼神を退け、一人我が物顔で、実に誇らしげに堂々と舞う^{注7}。

16番 ししまい ししこうじん 獅子舞・獅子荒神 神面の舞

猪と猪を戒める荒神(山の主)を象徴する舞。地舞(初参舞)の後、雄獅子、雌獅子の順に登場して、五方を割る。寝ころび、泥田ずり(動物が泥濘で転げ回ってダニや痒みを取るために泥を体に擦りつけること)、立ち上がって身震いなどの滑稽な所作を行い、一時神屋の外に出て、参拝者の間を巡る。参拝者は、縁起を担いだり、ご加護を得ようとして、獅子に頭を噛ませたり、ご祝儀を渡したりする。これをかしの実拾いと呼び、獅子が田畑で悪さをする様子を表していると考えられる。

獅子がかしの実拾いを行っている間に、荒神が神屋に登場し、戻ってきた獅子を両手に従え、

戒める意味で四方を引き回す。よって、獅子取り荒神とも言われる。

17番 ほんぜき 磐石 神面の舞

天鈿女命あめのうずめのみことの舞。豊作と子孫繁栄を願って舞う。生活文化を伝えながら村々を渡り歩くこぜ磬女の役であるとも、村の外から伝わる外来文化の象徴とも解される。腰の曲がった老婆が竹で編んだ大きなかごを背負って演じるので、かご面婆とも言われる。

ゴキ（飯茶碗）、シャモジ、マゴジャクシ（長さ三尺三寸の大シャモジ）、イモ（イセド芋）を使って、豊作や子孫繁栄を教える口上を述べ、面白可笑しい所作を繰り返す。途中、神屋に突如進入して来る参拝者（主に子ども）に背負ったカゴを掴まれて引き倒されたり、引き倒そうとする参拝者を捕まえたりして、観ている者の笑いを誘う。よって、即興的な演技をせざるを得ないため、芸達者なベテラン祝子が舞う。

18番 かななき 神和 神面の舞

大神様（天照皇大神）の舞であるとも言われる。親の命にも背くほどの暴れん坊あめわかひこのみことの天若彦命を諫める舞。嫁女面とも呼ばれ、うっとりで見取れる優美な舞である。所謂、荒振る神を鎮め祀ることを象徴している。祭り事の度に村人同士の諍いが多かったので、天若彦命を疎かにしている祟りによると考え、この優美な舞によって命の御心を鎮め、諍いを収めようとしたと伝えられている。まさしく、神を和ませる神和の舞である。

夜神楽は後半に入って、参拝者がそれぞれ楽しみにしている特徴的な番付が続くので、弥が上にも場の雰囲気は賑わう。この舞が始まると、神楽ばやしが盛んに出され、美しい神和の舞を写真に収めようと競うようにカメラのフラッシュが焚かれ、場の雰囲気は一段と盛り上がる。と同時に、優美な舞によって、厳粛な雰囲気も感じられる。

19番 よったりかなすい 四人神崇

十干と十二支の謂われを説き、それぞれの神を鎮め祀る舞。刀を持って舞うのは、東西南北を切り開くという意味である。地割では刀を持って神屋を区切って定めるという意味であったが、この舞では閉じられたものを、天も、地も、中央も切り開くということである。

20番 ひとつづぎ 一人鉦

四人が刀を持って舞った四人神崇に対して、一人で小太刀一対を持って舞う。前転すると同時に襷を掛けたり、抜き身の小太刀を両手に持ったまま前転や後転を繰り返す軽業的な要素も含まれる、たいへん勇壮な舞である。

21番 だいしょうぐん 大將軍

柴荒神の地舞。武甕槌命たけみかづちのみことと経津主命ふつぬしのみことの舞。狩猟生活を表現する舞と解しているが、下陣の締め括りに唱えられる唄であるスエミドリに「マツラオノ、クダスヤノベノ、アズサユミ、ヒイテハナセバ、アツササリケリ」とあるように、両神が莊嚴ゆみやの弓箭を携えて魔障を払い、山の神を鎮める舞である。なお、唄は、出だしの唄である地唄、中心となる神主詞である正木しょうぎ（催鷹楽）しょうぎ、締

め括りの唄であるスエミドリで構成されている。

揃えた2本の弓を並んで持ったまま高く飛び跳ねたり、矢の根を研ぎながら神屋を軽快に駆け巡ったりする。尾八重神楽の見せ場の一つである。

22番 しばこうじん 柴荒神 神面の舞

柴荒神は、神屋に降臨する神々の中心的存在、もつとも威力を持った神とされる。常緑の柴すなわち榊葉は、自然の生命力・再生力の象徴であって神の依代である。よって、神屋の象徴である漣の中心は、同じ常緑の椎木の枝葉を球状に束ねて造られる。そこには、天地陰陽五行に則って、一大三千界の森羅万象三歳の神々を象った御幣が立てられる。よって、柴荒神は、神主との問答によって、漣の因由を説くが、天の岩戸開きに発する漣の由来と漣に立てられる御幣の謂われを説いて、天地開闢から人間誕生に至る宇宙の摂理を解説する。

柴荒神は、綱荒神、衣笠荒神と等しく、荒神舞として次のような手順に従って進められる。先ず、神屋内で神面を着ける。荒神舞を舞った後、神主と問答を行い、問答が終わると神主に神面を譲り渡す。柴荒神は怒りを顕わに花御座の上で舞う。腰をくの字に折り曲げ、苛立ったように足を踏みしめ、眼を切る。やがて、神主との問答によって「免し取らせん」と怒りを収め、神主と向かい合って拍手を打ち、拝み合った後に退場する。問答は、楽を止め、花御座に据えられた太鼓に柴荒神が腰を掛け、神屋に撒かれた椎木の枝葉を足で踏み敷いて行われる。

本来、神面の舞は、すべて祭壇に飾られてある神面を拝礼の上取り降ろし、神屋内で着面していた。これが、御神体を神社本殿から神屋にお迎えする神輿渡御が始められ、神輿が祭壇に置かれるようになってから、祝子が装束などを身につける控えの間の棚に神面が飾られるようになったため、神屋に登場する前に控えの間で着面の儀が行われるようになった。ただし、威力のある柴、綱、衣笠の三荒神に限っては、神面を花御座の上に置いた折敷に飾り、素面で登場した祝子がその場で着面する。

23番 つなちまい 綱地舞 (初参舞)

綱荒神の地舞。ときには、聖が初参舞に代えて舞われる。聖は、打越宿神社の宿神様の地舞として伝わる舞で、大將軍と同様に、弓と矢を持って舞われる。

24番 つなこうじん 綱荒神 神面の舞

八岐大蛇を退治した素盞鳴尊の舞。柴荒神と等しく、荒神舞である。綱荒神の神主との問答は、綱荒神が太鼓に腰を掛け、十文字型に敷かれた大蛇（雄雌の大蛇の頭に稲藁で編んだ胴体を繋いだもの）を踏みつける勇ましい姿で行われる。

25番 つなかくら 綱神楽

素盞鳴尊が八岐大蛇を退治する様子を表した舞。蛇切とも言われ、八岐大蛇を退治する、蛇を切るとはすなわち邪心、邪気を祓うということである。ご加護が一番大きいとされる最も重要な神楽で、所謂、祈願神楽である。毎年、厄払いや病氣平癒などの祈願があり、必ず綱神楽が番付に入るので気付きにくい、綱神楽が行われると大々神楽となる。綱神楽が舞われるときは神屋

の設営も違ったものになり、雄雌の大蛇の頭が飾られ、ザンゼツ（えりもの）が張り巡らされる。祈願者達は、綱神楽の間、太鼓や笛などの山方の祝子とともに遡の下に座してご加護を受け、厄払いすなわち邪気を祓う。また、綱神楽を舞う祝子が身に付ける白鉢巻と白足袋は祈願者が寄進する。

言うまでもなく、参拝者が最も期待する神楽で、一定以上の神楽の経験を積んだ祝子が、白袴を内側から半分にたくし上げて黒脚絆を付けた雄々しい姿で、激しく勇壮に舞う。徹宵で眠気に襲われていても、その迫力ある舞に目が冴える。十文字型に敷かれた大蛇を高く飛び越え、大蛇によって四つに区切られた神屋を抜き身の刀を持ったまま、所狭しと六調子蹴足やカラス飛びで目まぐるしく駆け巡り、最後に「綱を断ずる」の掛け声とともに大蛇を裁断する。直ちに、傍らに控えていた祝子が素襖を切り口に被せ、裁断された大蛇を神屋の外に運び出す。刀を鋭く振り下ろして大蛇が退治されると、参拝者の心にも、目にも、爽やかな朝の陽光が差し始める。



綱神楽

26番 くれおろ 繰落し

衣笠荒神の地舞。笠取の舞とも言われる。遡のハマ注8に結ばれている麻縄を左手に、鈴を右手に持って舞う。麻縄には、農耕を左右する天候を占う陰陽道を象徴する日月の描かれた扇と天候と関わりの深い笠が吊してある。麻縄を手繰りながら交錯させて縊ったり、元に戻したりして舞い、徐々に麻縄を遡のハマから引き降ろす。最後に、麻縄に吊してあった扇を持って舞い、神屋の正面と背面を清め祓う。吊してあった笠の一つは、衣笠荒神が毛頭に付けて舞う。

27番 みかさこうじん 衣笠荒神 神面の舞

てんじん 天神、ちぎ 地祇を鎮め祀り、天地陰陽と開闢の謂われを説く。人間が生存するという事について

説明する舞。衣笠とは蓑と笠のことで、田畑を作るときに身に付ける物の象徴である。よって、衣笠荒神とは、田畑を作って食することと衣服を身に纏うこと、すなわち人間が生活することを意味する食と衣の神である。柴荒神、綱荒神と等しく、荒神舞である。

28番 伊勢神楽

神楽の起源である天の岩戸開きの事の起こりから顛末までを解説する舞。天照皇大神が天の岩戸に籠もられた際、思兼神が長鳴鶏を集めて歌いを企画され、天糠戸神が鏡を造られ、羽明玉神が曲玉を造られ、太玉尊が諸神を率いて御弊帛を造られ、天児屋根尊、太玉尊、手力雄命達が岩戸の前に榊を植え、鏡、曲玉、青和弊（麻緒）、白和弊（御幣）を飾られて、七日七夜の神楽を執行されたことの一部始終を説明する。

尾八重神社の宮司が舞う仕来りになっている。威厳を持って、格調高く舞われる。神面を着しない神の舞とも言うべき、尾八重神楽神髓の舞である。

29番 手力 神面の舞

手力雄命の天の岩戸口開けの舞。神屋の正面中央に、岩戸を見立てた柴二本が置かれる。その奥に、神面を横向きに着けた大神様（天照皇大神）が月と日を形取った祭具を持って、ご叡覧（覗き）の様子を見せている。

手力と戸開は完全な連結舞で、手力の後半、五ッ歌の後に戸開が舞い入る。その後、七ッ歌の途中で、手力雄命に導かれて岩戸から出られた大神様が月と日を手力に渡される。天照皇大神の再出現によって世に光明が戻った瞬間を象徴する場面である。五ッ歌、七ッ歌は天の岩戸開きの様子を歌で表したものであるが、七ッ歌は取歌で、祝子全員が神屋に揃って座し、手力が唱える上の句に続いて下の句を唱和する。

30番 戸開 神面の舞

戸隠雄明神の天の岩戸取り払いの舞。腕を捲り上げ、手ぐすね引いて天の岩戸に見立てた柴を取り払い、取り払うと同時に腰を抜かして退く。

31番 お清

火の神の舞とも、火伏せの舞とも言い、竈（火戸）と竈守を祀る舞。お清という名前は、竈を清める意味とも、竈を預かる嫁女に火を熾すために早く起きよと呼び掛ける意味とも解されている。舞い方は大神神楽と同じである。舞の途中で神屋を出て、先陣と下陣がそれぞれ分かれて、祝子の控えの間の囲炉裏と賄い方が接待の準備をする調理場の竈に行き、火伏せの口上を唱える。その後、振る舞いの御神酒や芋料理などの接待を受ける。接待から重い腰を上げて再び神屋に戻り、手に持った御幣をクルクル回す火伏せの所作などを行い、舞い伏して終わる。

32番 百式拾番（幣差の舞）

百式拾番とは、十二支を象徴する12と人間が抱える煩惱の数と言われる108を足した数のこととされ、過ぎる年への感謝を込めて舞う。

祭りの喜びそのものを象った舞でもある。降臨された諸々の神が祝子や参拝者と一緒に、神も人もなく、舞の玄人も素人もなく、舞い喜ぶ様子を象徴した舞である。参拝者から飛び入り希望者八名を募る。飛び入り参拝者は、それぞれ毛頭を被り、素襦を纏い、鈴を持って、賑やかな雰囲気の中、先導する祝子の動きを懸命に真似ながら楽しそうに舞い集う。舞は幣差である。飛び入り参拝者は、舞の最後に、先導の祝子達から繫いだ襷で一纏めに縛られ、神屋の外の参拝者の爆笑と拍手喝采を浴びる。これは、神楽によっていただいた神のご加護を逃さないために、纏めて縛られるのである。



百式拾番

33番 まいあげ 舞上

すべてを払って、神を送って、神楽の終わりを告げる山盛將軍の舞。大自然への深い畏敬の念をもって四季や天候などの荒れによる山の一年の難業を鎮めるとともに、山の神への感謝を籠めて、山の神を象徴する弓と矢を持って舞う。弓と矢を持って舞うのは、21番大將軍と同様に、すべての魔障を払い、神屋を払うためである。等しく弓矢を用いる舞であるが、大將軍では矢の根を研ぐ動作で舞い納め、舞上では矢を射る動作で舞い納める所作の違いが見て取れるように、唱えられる唄からも、より舞上の方で払いが強調されていることが分かる。大將軍では下陣の締め括りのスエミドリとして唱えられていた「マツラオノ、クダサヤノベノ、アズサユミ、ヒイテハナセバ、アツササリケリ」が舞上では出だしの唄である地唄として唱えられているからである。締め括りのスエミドリには「山人ノ狩スル山ニ執行カケテ、山林（盛）スエテ山人ノ、薪取ル間ニ日ガ暮レテ、里マデ照ラス、アリマジノ月」と、山の安寧と山の民の平穏な生活が唱えられ、舞い終える。

V. まとめ

前項の解説をもとに、尾八重神楽三十三番の番付を概括すると次のようになる。

1番	<small>しめあげ</small> 漣上	神屋が出来上がったことを告げる舞	迎神	
2番	<small>きよやま</small> 清山	神屋を清める舞		
3番	<small>ちわり</small> 地割	結界を定める舞		
4番	<small>ひさし</small> 幣差	御幣帛を象徴する舞		
5番	<small>はなき じん</small> 花鬼神	尾八重神楽の祖壺岐宇多守の舞		
6番	<small>だいじん か ぐら</small> 大神神楽	神楽の始まりを告げる舞		
7番	<small>しゆくじん ち まい</small> 宿神地舞	招神の舞	地主神の降臨	
8番	<small>しゆくじん</small> 宿神	壺岐家氏神岩清水正大幡大明神の舞		
9番	<small>ちんじゆ か ぐら</small> 鎮守神楽	招神の舞		
10番	<small>はちまん</small> 八幡	尾八重領主米良（菊池）家氏神八幡様の舞		
11番	<small>はっしや か ぐら</small> 八社神楽	八つの鹿倉神社を讃える舞		
12番	<small>やこんまい</small> 八子舞	招神の舞	祝福・豊饒の神の降臨	
13番	<small>いなり き じん</small> 稲荷鬼神	八つの鹿倉神社祭神の舞		
14番	<small>し ほう き じん ち まい</small> 四方鬼神地舞	招神の舞		
15番	<small>し ほう き じん</small> 四方鬼神	五方の神の舞		
16番	<small>し し まい し し こう じん</small> 獅子舞・獅子荒神	山の神の舞	荒振神の降臨	
17番	<small>ばんぜき</small> 磐石	田の神の舞		
18番	<small>かんなき</small> 神和	荒振神を鎮め祀る舞		
19番	<small>よつたりかんすい</small> 四人神崇	悪魔祓いの舞	天照皇大神の出現	
20番	<small>ひとつつぎ</small> 一人弔			
21番	<small>だいしやうぐん</small> 大將軍	招神の舞		祝福・豊饒の神の降臨
22番	<small>しばこうじん</small> 柴荒神	漣の謂われを説く舞		
23番	<small>つな ち まい</small> 綱地舞	招神の舞		
25番	<small>つな か ぐら</small> 綱神楽	八岐大蛇退治の舞（蛇切の舞）		
26番	<small>くれおろ</small> 繰落とし	招神の舞		昇神・送神
27番	<small>みかさ こう じん</small> 衣笠荒神	關開の謂われを説く舞		
28番	<small>い せ か ぐら</small> 伊勢神楽	岩戸開きを説く舞	昇神・送神	
29番	<small>たちから</small> 手力	岩戸開きの舞		
30番	<small>とひらき</small> 戸開			
31番	<small>きよ</small> お清	火の神の舞	祝福・豊饒の神の降臨	
32番	<small>ひやくにじゅうばん</small> 百式拾番	感謝と喜びの舞	昇神・送神	
33番	<small>まいあげ</small> 舞上	神楽の終わりを告げる舞		

三十三番番付の構造分析は、改めて、精緻かつ慎重に行わなければならないが、番付それぞれの趣意によって纏めてみると、このように6つに集約することができる。

1～6番：迎神では、漣を立て、修祓、地鎮めを行い、夜神楽開幕を告げる番付に、御幣帛を象

徴するとともに岩戸開きに関わる太玉尊を敬って舞う幣差が組まれている。すなわち、徹宵で執行される夜神楽の開幕を象徴するとともに、神楽を含む日本の舞踊の始原とされている天の岩戸に籠もられた天照皇大神再出現のために諸神が企画されたことをも象徴している。さらに、神楽の始原に倣って、尾八重神楽の始祖である壺岐宇多守を象徴する花鬼神がここで登場する。

7～13番：地主神の降臨では、尾八重の本社、鹿倉社の神々が登場する。最初に、地区住民が古くから祀っていた湯之片神社を創建した壺岐家の氏神が宿神様として登場する。次いで、尾八重領主の米良（菊池）氏の氏神が八幡様として登場し、鹿倉社の神様が続く。

14～17番：祝福・豊饒の神の降臨では、五方の神に続いて、山の神、田の神が住民生活に馴染みのある猪の狩人、竹かごを背負った老婆の姿で登場し、五穀豊穰、子孫繁栄を願う。

18～27番：荒振神の降臨では、優美な舞で荒振神を和ませる神和が最初に登場し、真剣の舞と曲舞で悪魔祓いをする四人神崇、一人釵が続き、弓矢を使った大將軍などの特別な地舞を伴った柴荒神、綱荒神、衣笠荒神が登場する。荒々しく怒りの様相で登場する荒神様は、神主との問答によって怒りを収め、守護神となって神屋を後にする。ここは、前段の14～17番と併せて、神様に感謝してご加護をいただく番付とみることができる。夜神楽開催の主旨を構成する番付である。

28～31番：天照皇大神の出現では、岩戸開きの顛末を象徴している所謂、岩戸神楽の番付であるが、最高位の大神様である天照皇大神の登場によって夜神楽がいよいよ最高潮に達する場面である。これに続く31番お清（火の神の舞）には、天照皇大神の天の岩戸からの再出現によって世を照らす太陽の光が戻り、命の灯火も再点火したことを象徴する意が込められているのではないかと解される。よって、火の神の舞は、山の神の舞、田の神の舞と同じ纏まりに組まれていてもよいが、意図して、天照皇大神の再出現直後の位置に組み込まれているように思われる。

32～33番：昇神・送神では、神も人もなく挙って感謝と喜びを舞い上げる百式拾番をもって夜神楽の大団円を迎え、神送りとなる。

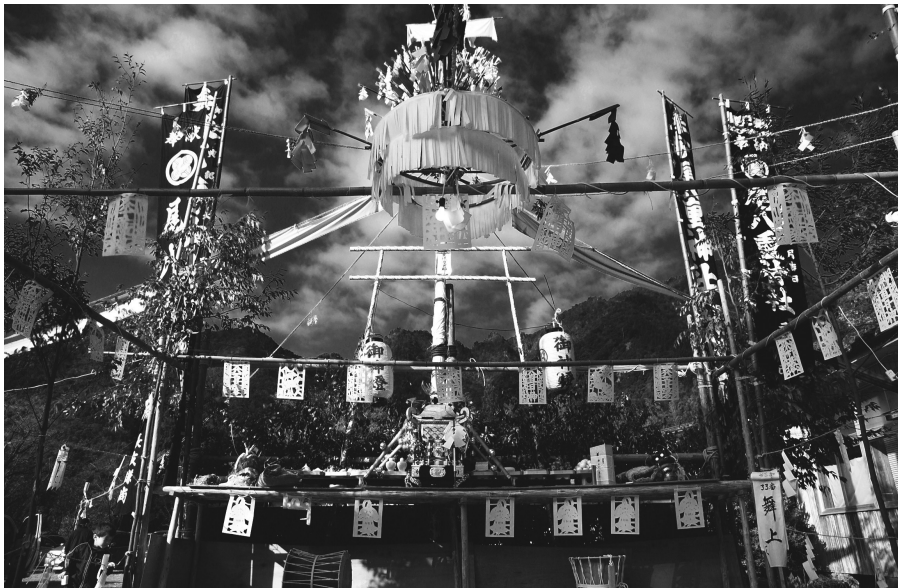
中国、四国、九州地方を中心に里神楽の調査研究を行って『西日本諸神楽の研究』を著した石塚尊俊は、尾八重神楽と同じ東米良に伝承されている銀鏡神楽の詳細な番付分析をもとに「そもそもこの日この夜のお神楽は、その在所の神々のためのお神楽である。けれども、場所が日向である以上、鵜戸の大神の存在を無視するわけにはいかないし、さらに日本最高の大神たる伊勢の大神の来臨を乞わぬというわけにもいかぬ。かくしてこういう形ができたわけであるが、ともあれ、ここに神楽を行うにあたって伊勢の大神や地方の大神の来臨を仰ぐけれども、同時に、いやそれ以上に在所の神々の降臨を求めるといことが大切である。けだし、これこそ神楽の本旨であって、こうなってこそ初めてこの日この夜の御神楽をこの御神屋において執り行う筋も立つのである。しかるに、この至極当然なことが他地方ではもはや行われていない。ことに演劇舞が発達した地方にあっては、もはやその破片さえ窺えない。これはけっして古い形ではないはずである。すなわち、神楽の祖型たる、いまやここ米良の山中にこそ残留しているといわざるを得ない。」^{註9}と述べている。

この石塚の解説によるならば、尾八重神楽こそ、神楽の祖型たる米良山中神楽の典型とみなされるべきである。在所の神々の降臨を求める神楽であるということだけでなく、尾八重神楽では地区住民との関わりが深く大切にされている在所の神から順に降臨されるからである。神楽の始原を象徴する番付の途中で、尾八重神楽の始祖であり湯之片神社の開祖でもある湯之片若宮大明神がいの一番に降臨される神様として登場する。地主神が降臨される番付においても、地区住民が古くから

お祭りをして親しんできた湯之片神社壺岐家の氏神である岩清水正八幡大明神が宿神様として、尾八重の領主米良（菊池）氏の氏神である八幡様よりも先に降臨される。厳格な仕来りに則って、厳粛な雰囲気のもとに登場される宿神様は、尾八重神楽に登場される神々の中であって最も慕われ尊ばれている神様である。

湯之片神社では、代々神主を務めてきた壺岐家の法者がたいへん立派であったので、尾八重領主が京の都に使いを送り、北白川宗家のお墨付きをいただいて、法者を湯之片若宮大明神として神格化したと伝えられている。よって、湯之片神社は、地区住民から崇敬され慕われるとともに、支配者となった米良（菊池）氏からも一目置かれる権威ある神社であった。このようなことから、住民との関わりが深い神様から先に降臨されるという番付が編まれたのではないかと推察される。しかし、ここでは、尾八重神楽においては地区住民がその存在を身近に感じている地主神から順に降臨されるということを確認するところで留めておく。

米良山中神楽が共通に有している神体具現の神楽、在所の神々の降臨を求める神楽といった特色について広範に捉える中で、尾八重神楽の番付構成の特色とその由縁も熟考を重ねて解き明かしていきたい。



遊

謝辞

神戸在住の写真家生田浩氏には、本稿への写真提供を快く承諾して、掲載のために調整までしていただきました。心から感謝申し上げます。

注

1. 東米良村議会議員であった児玉重夫が昭和50年8月に纏めた『東米良郷土史』に「領主則忠の時、小川にて尾八重、銀鏡、小川の三神楽を比較、奉納されしに、尾八重神楽が断然よく見どころありと推賞されたと言う。」との記述がある。領主則忠は、焼死した則明（栄叙）の跡を継いで嘉永元（1848）年に17代米良家当主となり、明治40年に没している。華族に列せられた武臣男爵の父、武夫男爵の祖父である。菊池氏に復姓した明治維新後は忠と『西米良村史』などに記載されていること、領主と明記されていること、維新前後の世情などを併せて考えると、維新の争乱が始まる以前のことと思われる。
2. 『郷土誌東米良』11頁参照。
3. 宇多守は都萬の社人との神道問答で勝利を収め、勝利の証として神面を持ち帰ったが、後にこのことによって恨みを買ってしまい、都萬方の鍵にかかって悲運の最期を遂げた。やがて、宇多守の崇りを恐れた都萬の人々は、御霊に権現の尊号を贈って都萬神社に祀ったと伝えられている。『郷土誌東米良』541頁参照。
4. 太鼓に渡した横木を楽と呼び、この横木を太鼓のリズムに合わせて打つことや打つ人のことをがくうち楽打ちと呼ぶ。
5. 銅製シンバルのこと。2個で1対であるそれぞれの外側中央に紐を通し、指で挟んで打ち鳴らす。銅拍子、銅鉞、銅鉞子、土拍子、鉞などとも表記される。
6. 『郷土誌東米良』には、二人舞の先導の祝子を上御人、対する祝子を下御人と呼ぶとある。
7. 解説書では、東・西・南・北・中王（五方）の神面舞と記載されている。中王は中央と記載してもよいように思われるが、東西南北の鬼神とは装束が違い、四方を圧する堂々とした舞は中王の鬼神とするのが適切のようである。
8. 一大三千界の森羅万象三歳の神々を象った御幣が立てられる漣の中心は、椎木の枝葉を球状に束ねて造られているが、その天地は稲藁で編まれた円座で塞がれている。その円座をハマと呼ぶ。
9. 『西日本諸神楽の研究』245頁参照。

主要参考文献

- 1) 日高正晴監修、尾八重神楽保存会編集・発行『平成十四年度ふるさと文化再興事業 尾八重神楽解説書 神楽唄・問答全集』、2003年。
- 2) 東米良郷土誌編集委員会編集・発行『郷土誌東米良』、1989年。
- 3) 石塚尊俊『西日本諸神楽の研究』開明堂、1979年。
- 4) 西都市史編纂委員会『西都の歴史』西都市、1976年。
- 5) 西米良村史編さん委員会『西米良村史』1973年。
- 6) 木城町編集・発行『木城町史』、1991年。
- 7) 山口保明『宮崎の神楽』鉾脈社、2000年。